



経営者及び経営者候補に読んでほしい書籍


200330 ロリケン 浜口優

経営者に求められる5つの要素 **理**(ロジック 戦略思考)、**情**(ヒューマン・パッション 人間力・情熱)、**志**(ミッション使命 ビジョン)、**動**(実行力)、**新**(チャレンジ 変革)を、読んでほしい書籍で考えてみた。

業務の知識経験や業界常識だけで経営者として役割を果たす時代は過ぎ去ろうとしている。あらゆる企業がIT企業化する。自らの言葉で価値観とビジョンを語れるのか。組織を動かすには思考力人間力さらに「我々が進むべき物語」を描いていく「想像力」が求められる。

	著者・書名・出版社・出版年	内容
1	<p>司馬遼太郎 「花神」 新潮文庫 1976</p> 	<p>磯田道史氏は著書「司馬遼太郎で学ぶ日本史」のなかで、「花神」を全司馬作品の最高傑作だと推す。</p> <p>田舎の医者にすぎなかった長州藩の大村益次郎(村田蔵六)が、大阪の適塾で蘭学を学び、宇和島藩で蒸気船を建造、兵書を翻訳、江戸で蘭学兵学塾を開き、幕府の蕃書調所の講師にも、さらに地元長州藩へ取り立てられ桂小五郎の推挙で、軍務大臣に。幕府の長州征伐を打ち破り、江戸を平和に開放、明治維新へと橋渡した。</p> <p>日本の近代軍備の祖と言われる→【辺境傍流からイノベーションは生まれる】 当時では稀有なりーダーシップ要素→【徹底した合理主義者】【学問と技術の人、プロは希少価値だった】</p> <p>磯田氏「常識、形式の否定から発展が生まれる」「時代を変革した合理主義」</p>
2	<p>野中郁次郎、戸部良一、寺本義也、鎌田伸一、杉之尾孝生、村井友秀 「失敗の本質—日本軍の組織論的研究」 中公文庫 1991(単行本は1984年)</p> 	<p>2020年代は有事が常態化していく環境になるかもしれない。経営者(指導者)は、平時の戦略、組織から再考を迫られる。本書は野中郁次郎氏などの組織論研究者と防衛大学の戦史研究者により1984年出版。失敗の事例研究としてノモンハン事件、ミッドウェー作戦、ガダルカナル作戦、インパール作戦、レイテ海戦、沖縄戦を分析して、共通する性格として、あいまいな戦略目的、短期決戦の戦略志向、空気の支配、狭くて進化のない戦略オプション、人的ネットワーク偏重の組織構造、学習を軽視した組織、プロセスや動機を重視した評価などを挙げている。</p> <p>70年を経てもその本質は企業経営に残る。90年代のバブル処理にも露呈。「ゲームのルールチェンジ、イノベーションが苦手」「練磨や型の伝承が得意」「成功したら分析せずに繰り返す」「現場からのフィードバックを活かせず上層部が全て決める」「情報を隠蔽する」…</p> <p>良薬は口に苦し。研究書であるため難解であるが、サブテキストとして鈴木博毅「超入門 失敗の本質」ダイヤモンド社がある。</p>

<p>3</p>	<p>入山章栄「世界標準の経営理論」ダイヤモンド社 2019年</p> 	<p>ひと昔前の日本のビジネスパーソンの上級必読書といえば、ポーター「競争の戦略」、ジム・コリンズ「ビジョナリー・カンパニー」、コトラ「マーケティングマネジメント」あるいはドラッカー本などがあつた。</p> <p>しかし世界ではどういう経営理論が主流なのか気になるところだ。</p> <p>入山氏は日本ではほとんど知られていない経営理論をビジネスパーソンに網羅・体系的に紹介したいという。冒頭の「ビジネス現象と理論のマトリクス」がユニーク。範囲の広さと、既存の経営学書には見られない区分けが興味深い。各章に実証研究例のリスト。</p> <p>大冊なので全部読み通すのは簡単ではない。経営実践から乖離してる内容もある。経営課題に合わせ、選択して理解することが望ましい。</p> <p>【第1部 経済学ディシプリンの経営理論】 第1章 SCP理論(ポーターの戦略)、リソース・バースト・ビュー(RBV) パーニーの理論から始める。経済学のさまざまな原則に触れる。 (Structure-Conduct-Performance 産業構造 企業行動 業績)</p> <p>【第2部 マクロ心理学ディシプリンの経営理論】 知の探索・知の深化の理論 認知心理学ベースの進化理論</p> <p>【第3部 ミクロ心理学ディシプリンの経営理論】 リーダーシップ モチベーション 意思決定の理論</p> <p>【第4部 社会学ディシプリンの経営理論】 ソーシャルネットワーク ソーシャルキャピタル理論 組織エコロジー理論 変化の時代にこそ不可欠な「超長期」時間軸</p> <p>【第5部 ビジネス現象と理論のマトリクス】 戦略とイノベーション 組織行動・人事 企業ガバナンス グローバル経営 アントレプレナーシップ 企業組織のあり方 と経営理論</p>
<p>4</p>	<p>出口治明 「哲学と宗教全史」 ダイヤモンド社 2019年</p> 	<p>出口治明氏は経営トップ経験者にして博覧強記の読書家、多数の歴史書を著している(日本生命を経て、還暦でインターネット生保を起業、古希で大学学長に就任)</p> <p>ビジネスパーソンを意識して、西洋と東洋の哲学と宗教の大きな流れを体系的に俯瞰している。大づかみの視点や言い切りは専門書では得られない。東洋と西洋の相互関係の記述が貴重(三つ折り図表)。</p> <p>自分が深めたいテーマのガイドになる。</p>

5	<p>ジョン・P. コッター 「企業変革力」日経 BP社 2002年</p> 	<p>リーダーシップは企業変革を推進する力である。マネジメントとは異なると強調する。 変革が進まない原因には、内向きの企業文化、官僚主義、社内派閥、相互の信頼感の欠如、不活発なチームワーク、社内外に対しての傲慢な態度、不確実に対する恐れなどがある。変革を進めるうえで8段階のプロセスが有効だと主張する。</p> <p>①危機意識を高める ②変革推進のための連帯チームを築く ③ビジョンと戦略を生み出す ④変革のためのビジョンを周知徹底する ⑤従業員の自発を促す ⑥短期的成果を実現する ⑦成果を生かして、さらなる変革を推進する ⑧新しい方法を企業文化に定着させる</p>
---	--	--

番外1

出口治明氏と並ぶ「経営トップ経験者にして読書家」といえば 丹羽宇一郎氏(元伊藤忠商事会長 元中国大使)。実家が本屋、子供時代から本に親しんだと。

「死ぬほど読書」幻冬舎新書 2017年

第1章 本に代わるものはない 第2章 どんな本を読めばいいのか 第3章 頭を使う読書の効用
 第4章 本を読まない日はない 第5章 読書の真価は生き方に表れる 第6章 本の底力

「社長ってなんだ」講談社現代新書 2019年

第1章 孤独と覚悟 第2章 資質と能力 第3章 報酬と使命 第4章 自戒と犠牲 第5章 信頼と統治 第6章 後継と責任

番外2

経営者として観ておきたい映画

黒澤明「七人の侍」自身の年齢と立場が変わると、見方と印象深い人物が変化していく。
 島田勘兵衛(志村喬) 統率力影響力人望力 組織化プロセス

人として「情の奥行き」を深める

落語「芝浜」 支えられて淡々と生きる尊さ

小説 池波正太郎 藤沢周平 少しずつ読む

(勧善懲悪でないクールな時代劇 松竹京都制作「鬼平犯科帳」中村吉右衛門 潔い)

以上